市内に残る戦争の記憶

皆さんは、学校や公園に「慰霊碑」や「平和の礎」と書かれた石碑が建っているのを見たことがありませんか。これは戦争で亡くなった人たちを追悼する「戦没者慰霊碑」です。市内には、こうした戦争の記憶を伝える慰霊碑が50カ所以上あり、遺族や地域の人によって大切に守られています。慰霊碑には戦争で亡くなった人の名前が刻まれているものもあり、一人の人間が戦争で命を落としたことを生々しく伝えています。

山の斜面に目を向けると、低い位置に穴が開いている場所があります。これらの多くは戦時中に空襲から身を隠すために作られた防空壕です。このように、市内でも戦争があったことを今に伝える場所が残されています。

1 堀之内小学校にある慰霊碑

2 六郷小学校の東にある平和の礎

市内の戦争被害

菊川市においては、菊川地区で832人、小笠地区で488人の人が戦死・戦病死しています。都市部のような大規模な空襲の被害はありませんでしたが、JR菊川駅の北側には当時、金属製品を作る大きな工場があり、敵軍の戦闘機による機銃掃射を受けたと記録が残されています。また、牧之原台地の上にあった、「海軍大井航空隊」の基地は、日本軍の重要基地であったため、敵軍の攻撃目標となり、「牧之原の台地が燃えているのを見た」との証言が残っています。菊川市の上空を爆撃機が何機も飛んでいる姿を見たという人も多くいます。そして、終戦が近づくにつれ、市内でも空襲による被害が発生します。

昭和20年5月、半済の島自治会付近の「おくたんや」という場所に爆弾が落ちました。幸いけが人などはいなかったようですが、「1つの谷が全部やられた。爆風がすごく、木の葉1枚も残すことなくなくなった。岩も吹っ飛んで、家の戸はガタガタ鳴り、ガラスは破れた。一抱えもあった立木に穴が空いた(菊川町史近現代通史編より抜粋)」との証言が残されています。

また、終戦間際の昭和20年7月には、小笠東地区の古谷・丹野に「缶詰爆弾」が投下され、死傷者が出たとの記録も残されています。

▲戦没者の名前が刻まれた石碑(小笠地区慰霊碑)

▲半済地内に残されている防空壕

当事者の減少と承継の課題

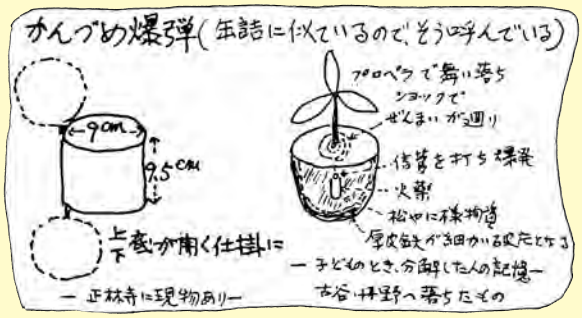
今年の3月25日、加茂の舟岡山公園内にある「舟岡山招魂社」で、菊川市遺族会壮年部の解散式が行われました。

壮年部は、昭和61年に当時の菊川町遺族会の内部組織として発足しました。会員が戦死者の子どもに限られていることから、一番若い人でも昭和19年生まれと、高齢化が進んでおり、発足当時80人以上いた会員も現在では40人ほどにまで減ってしまいました。今回、活動の継続が困難となったことから、親組織の遺族会と合流することとなりました。

このように、戦争当時の体験を知る当事者世代の減少が進んでいます。そして、戦争を知る世代の減少と共に、戦争の悲惨さと平和の大切さを次の世代へどのようにつないでいくかが課題となっています。

▲招魂社で、戦没した肉親に壮年部の解散を報告する遺児

古谷・丹野に投下された缶詰爆弾

昭和20年7月30日夜、小笠東地区の古谷・丹野の広い範囲に缶詰爆弾およそ50個が落とされ、児童1人、大人6人が亡くなりました。爆発しないままの爆弾もあり、次の日の朝、様子を見に来た人が運悪く爆発に巻き込まれたことや、終戦の翌年に兵隊が残された不発弾を回収し正林寺の裏山で爆破処理したことが当時を知る人の証言から明らかとなっています。

(戦争を語る会の資料より)